

氏名	小 ^オ 田 ^ダ 薫 ^{カオル}
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第332号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉記憶の在り処、大きな街 〈論文〉記憶の在り処—不安と不在に向き合う造形—
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 篠原行雄
（論文第1副査）	〃 准教授（ 〃 ） 小松佳代子
（作品第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 丸山智巳
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 田中一幸
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 橋本明夫

（論文内容の要旨）

私はこれまで家や建物のかたちを借りて作品制作を試みてきた。生きていく中での大切な記憶や思いが「ある」ということ、それを示す道標としての作品を目指している。生活する中でもある特定の家や建物を見てそれに少しずつ自身の気持を委ねることで、過去および現在の自身の在り方やこれからの生き方について考えてきた。つまり、自身の気持を預けた家や建物をモチーフとして作品をつくるということは、ある一定期間の「私」を象徴するものなのである。

記憶もこの私自身もいずれは「なくなる」ということ、そしてそれらの存在の不確かさや不安定さに私は不安を抱いている。しかし、むしろその不安こそが自身の作品制作のみならず、日々を生きていく原動力として不可欠なものとなっている。「不安」を受け入れ、「不在」の存在を了解し、次の段階へ踏み出そうとすることが、私が制作を行うにあたっての最も重要な動機である。そして、それがあからこそ私は制作を続ける意欲を持ち続けていられるのである。

本論文では、あるべきものが「ない」という状況、また自身の記憶や存在の不確かさや不安定さに出会うこと、これらから生まれる不安の根本とはいったいどのようなものであるかを探り、その感覚を享受することからどのような造形が生まれるのか、さらにはその感覚を受け止め納得していく過程について言及しようと試みた。つまり、自身の中の不安と不在の感覚がいかにか作品制作に結びつき、また造形表現においていかにその感覚に向き合い発展させていくかを論じた。

本論文は大きく4つの章から構成される。

はじめに、私に大きな影響を与えている「家」という存在が、自身の現在の作品制作を行うきっかけとなったことを跡付けた。「家」とはいかなる意味を持つものであるのかを考察したことで、それが私たち人間にとって必要不可欠な「よりどころ」としての場所であることを改めて確認した。

第1章「不安と不在」では、「不安」や「不在」とは自身にとってどのようなものであるかを定義づけた。これまでに自身が感じたいくつかの具体的な例を挙げ、認識や精神、空間等に関する理論を踏まえ、それらを参考にしながら自身の作品制作におけるテーマの分析を試みた。その結果、作品制作を行うことは私にとって自身の在り方を模索することと同義であり、自身のこころの中にある「不安」と「不在」とに向かい合い、それらを乗り越えていくための場所を生み出すことであると認識した。

第2章「不安と不在に向き合うすべ」では、金属加工の1つの表現方法である鍛金が持つ独特な性質

について、制作者である私自身の視点から考察した。自身が表現方法として鍛金を選んだ理由および鍛金で表現することに依ってのみ体験できることを示し、さらに鍛金技法と鉄を用いた作品制作の意義について検討した。自身にとって鍛金とは、鉄と熱と私自身の意思を1つにかたちづくっていくすべであり、鍛金が自身の思いをダイレクトに表現する方法として最も適した方法であることを述べた。

第3章「記憶の景色」では、自身がこれまで行ってきた作品を振り返りながら、こころの中の切り取られた風景に迫った。私が日々生活する中でどのようなことに不安を感じ、不在を確かめ、記憶の在り処を探してきたのか、そうした「不安」や「不在」の記憶が作品として表現に結びつくまでの背景を探った。

第4章「風景から確かな場所へ」では、博士展で発表する作品「記憶の在り処」の発想の源から作品になるまでの工程を辿りながら、作品を通して鑑賞者に伝えたい制作の目的を提示した。本論文を通して考察したことで生まれた新たな思いや自身の迷いを経て、作品がかたちづくられていく過程を、制作工程を交えながら示した。

おわりに、「不安」と「不在」の存在を知り、それらと向き合う自身の制作の持つ意義と今後の課題について、さらには制作者である私や鑑賞者にとっての本論文の持つ意義を模索し、本論文のまとめとした。

自身の思いを建物のかたちを借りて造形的に表現することで、私は「不安」と「不在」の存在と向き合い、自身や自身の記憶がいま、ここに「ある」ことを実感として感じるができる。一方、作品を鑑賞してもらうことで、私は自身が感じ、向き合ってきた感覚を他者に訴えることができる。また、その感覚を同じように感じ、それについて考えてもらうことで、作者である私と鑑賞者は同じ感覚を共有することができる。私が鍛金を用いて造形することは、不安と不在から次の段階へ1歩踏み出す手段であると同時に、他者と共有できる場所を生み出す手段なのである。本論文を通して自身の造形の源にある不安と不在の存在を明らかにしたことで、それらと向き合う手段を身につけ、私は少しずつ前に進むことができた。本論文で見出した私なりの答えを、これからの作品制作の新たな展開とさらなる可能性に繋げていきたい。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、筆者自身の制作の動機となっている不安と不在の内実について深く考察し、鍛金技法と鉄を用いた制作が、不安や不在と向き合う上でいかなる意義を持っているかということを制作工程に即して具体的に記述している。また、自らの作品の意味を対象化し、制作過程において筆者が感じ考えていることを精緻に言語化している。現象学や心理学の知見あるいは文学作品の記述なども借りながら、捉えがたい制作者の感覚を可能な限り他者にわかるように記述した好論文である。

第1章では、筆者が感じる不安と不在の原点となった個人的体験を記述することで自己の制作テーマの意味とその結果について論じている。記憶の変容やこころの殻の薄さといった不安をもたらす要素を代補するように堅牢な建物を鉄という素材で作り、そこに扉や錠をつける作品は、筆者にとって実際に住む家が本来そうであるような人間が生きるうえでの根拠となるような場所をつくることであることが明らかにされている。自らの記憶や思いが宿る場所を作品としてつくることで、不安や不在に向き合うことができるのだという気づきを得たことが大きな成果であろう。

第2章では、筆者の制作技法である鍛金において鉄を叩くということの持っている意味、接合と着色において得ている時間感覚、道具を介して素材と関わらざるを得ない制約など、制作工程を分節化し、制作過程において制作者が得ている内観を丁寧に記述している。熱によって自由にかたちを変化させることができ、溶接や接合によって自在に作品の大きさを変えていける鍛金という技法は、筆者自身の内

的世界をそのまま映し出すものであり、その意味で鉄と熱と制作者の意思をひとつにかたちづくっていくすべであることがあらためて確認されている。それと同時に、家や建物というモチーフをもとに表からも裏からも造形する制作過程において、その建物を外側から俯瞰する視点と、あたかもその建物に住まうむかのように内側から見上げる視点の両方を持ち得ることを見だし、筆者にとって制作は単なる造形を超えて自己存在をかたちづくっていくという意味を持つことが明らかにされている。

第3章・第4章は、筆者自身の作品分析である。第3章では、筆者が修士課程以降制作してきた作品について、あらためて制作意図とその結果できあがったかたちについて分析している。これまでの作品を分析することで、第4章で論じられる博士修了作品の構想が明確化される。筆者はこれまで、堅牢な建物に錠のついた扉をつけ、その内側に記憶や思いを預けることで不安と不在と向き合おうとしていたが、博士修了作品では、そのようにひらすら自己の内面へ向かっていった視点が転換され、作品制作はむしろ他者との共有できる場所をつくることであるという新たな作品観を得ていく。その過程が第4章では詳細に論じられている。

自己の制作動機、技法、造形に徹底的に向き合い言語化していった結果、作品観の変容がもたらされ制作そのものが大きく展開したことは、制作者が論文を書く意味を示して余りある。以上のような点において、課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で評価し合格と判定した。

(作品審査結果の要旨)

申告者の作品研究は建物の形状を仮託し自己の思い、或いは記憶などが存在するというを示す道標としての作品を制作している。建物には、住む住民の気配のようなものがある。住み替えなど移り住むときに同時にその気配が失われる「ない」という感覚、それと同質の空虚感を身内の死に遭遇したときに感じた「不安」と「不在」の存在を強く申告者は意識する。建物のかたちを借りて金属造形表現することでその存在と向き合い、自身や自身の記憶がここに「ある」ことを実感する一方で、作品鑑賞にも作者と同じ感覚を共有する場所をつくりだす装置と位置付ける作品研究である。

提出作品「記憶の在り処」は、建物の形状を仮託し自己の存在を確認する場の表現を試みたこの作品では、巨大ビルが止めどなく増殖し景色が変化を続ける都市に表現を拡大している。都市の無機質に繰り広がる立ち並ぶビル群の中に自己の場所を探し彷徨する行為は、ギミックを用いて鑑賞者である他者と体感を通して共有する効果と作品の視覚に魅力をくわえている。立面は、金属の断片を溶接で繋ぎ合わせた板材で構成。金属の一元加工で制作を進めていく鍛金技法と蓄積や増殖で形が造られる行為は、作者の表現と調和したことが大きいと考える。技法を限定し表現に傾倒して、金属のもつ重厚な質感と作者の制作行為による蓄積でつくられた、その独特な世界観。自己のもつ心象的な場所を鑑賞者の概念に重ね映す装置としての側面をもつ造形表現を目指した提出作品は、興味深く明確に鑑賞者にイメージを伝える事の出来る優れた作品であり、審査にあたった全員が学位の水準を満たしていると判断した。

(総合審査結果の要旨)

自己の制作の根拠となる根幹を求めて、過去の記憶にある不在感、不安感を手がかりに論考をすすめた。

内部空間を持つ建築物をモチーフとしその形に気持ちを託し不在とも空洞とも解釈出来るその内部空間に、自己の不在感、不安感を投影させている。

制作にあたり鍛金による手法を用いる意味、表面処理による時間感覚等詳細に分節化を試みている。

論考の深化とともに、制作面との矛盾が露呈され、改めて頭での論考と感覚的な表現伝達とのパラレ

ルな関係に気づいたのではないかと思われる。

作品を制作し表現する事とは、まさにこの様な事が果てしなく繰り返されるラビリンスなのではないか。

本人はまさに博士課程において、それらを素直にだどり、自己を見つめ直し、新たな出発点となる手がかりの前に立っている状態である。

正面から自己の表現の根幹に立ち向った論考と姿勢を評価し、博士として承認された。